

わが心の自叙伝

菅原洋一

▷25

アルバム「80歳シリーズ」レコーディング時の一枚



「おじいちゃん、僕の方まで元気に歌ってね」と言い残された気がした。

私は残りの人生をやはり歌で表現していきたくて思い、80代になってからスタートさせたアルバムを続けて発売することにした。

童謡を18歳で下へした。

「81才の私からあなたへ」では孫の病床で歌った「花は咲く」を歌い、「82才の私からあなたへ」では父が好きだった「椰子の実」を歌った。「83才」のときのアルバムは息子英介とともに「息子も歌う思い出の歌」と題し発売した。

ここ数年、息子と一緒にステージに上がるが多かった。よくお客さまから「声やしんがそっくりですね」と言われ、自分たちのほうがびっくりしたものだ。

歌い続ける

英介は私の77歳のお祝いにと「ビューティフルメモリー」を作曲してくれたり、亡くなった童謡への思いをつづった「Fly, Fly away」を作詞作曲し自ら歌ってCD化したり音楽活動もしているが、親子共演のアルバム制作はうれしい記念になった。

考えてみれば英介誕生の年に私は「今日でお別れ」でレコード大賞を受けたが何しろ忙しくて旅から旅、コンサートにテレビ出演と、家にいる時間がほとんどなかった。時たま家から仕事に出ると「また遊びに来てね」などと言われ、ちよつとさびしい思いをしたものだ。

今できること…の観点から2

人でアルバムを作ろう。中でも今までの私のカラーにはなかった河島英五の「酒と泪と男と女」は好評でテレビでも何度か歌わせてもらった。この吹き込み中に同じ年齢で長くジョイントコンサートをしていた盟友、ベギー葉山さんが亡くなり、彼女の「学生時代」や「ラ・ノビア」を歌ったのもこの盤だ。

「84才」のアルバムは童謡誕生100年の意味合いから「大人のための子守唄」とし、

童謡第一号曲の「かなりや」、そしてふるさとの播州平野の中で生まれたとされる「赤とんぼ」を歌った。作詞した三木露風は兵庫・たつの市の出身である。そして「85才の私からあなたへ」は、「歌い続けて60年」ぶり返ればビューティフルメモリー」というタイトルでの発売だった。「知りたくないの」など代表作をはじめ、タンゴの「小雨降る径」などを85歳の歌声で歌い直し、わが人生の歩みを「マ

イ・ウェイ」にのせた。60年の長きに渡って歌ってきた感謝をそこに込めたのだった。

発売直後にうれしい報告が届いた。ひとつは出身地であり私の礎となった故郷の加古川の観光大使に任命されたことである。顔写真付きの観光大使の名刺を手にながら加古川は日本の中で一番穏やかで言葉も優しい場所だと再認識した。

加古川弁を聞くとほっとする自分があることにあらためて気づいた。さらに「第60回日本レコード大賞」では企画賞をいただいた。

年齢的なことや周年の年だったから特別賞かと思っていたら、なんとアルバムを対象にした企画賞受賞で、驚きながらも喜んだ。この賞と一緒に受けたのがJ.U.J.U.やスキマスイッチ、島津亜矢など若い現役ばかりだったことも、私を大いに励ましてくれたのだった。

(すがわら・よういち「歌手」)

80代、アルバムを毎年発表